ヴァチカン内部の対立

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

ヴァチカン内部の対立

２月４日の朝、ローマの町を散歩していた人は、ローマ法王を非難するポスターがあちこちの壁に貼られているのを見て、非常に驚いたようだ。ローマの方言で「あなたの慈悲はどこにある？」と書かれたものだった。法王の写真入りで、数十枚がマニフェストとして使用されていた。そこには、ローマ法王が決定ないしは決済したいくつかの例が記されていた。一体誰の、あるいは何派の仕業だろうか。犯人は分っていない。

ヴァチカンの方では、このマニフェストを相手にせず、なかったかのように小さく扱った。「このようなことは、我々の安眠を妨げるものではない。犯人たちは犯人たちの道を進めばいいし、私たちは私たちの仕事をする」との声明を出した。マニフェストにはサインや花押、シンボルマークもなかった。ただ法王の一般謁見の時の写真が使われていただけだ。このことは昨年12月から今年１月にかけてのマルタ騎士団トップの人事の件を指しているのだろうか。

このようなローマ法王を非難するようなマニフェストは初めてのことではない。1986年、法王ヨハネ・パオロ２世のときにもあった。同法王が世界の宗教指導者をイタリア・アッシジに招待して「平和の祈りの会」を開催することは、キリスト教の絶対性から考えれば異端的発想だとされたのだった。もう一つは最後のコンクラーベの直前のことで、「トルクソン（Turkson）（ガーナのカーディナル）に投票しろ」というものだった。

マニフェストに表されたことは、ヴァチカン内部にローマ法王の施政に反対する勢力の存在することを示している。現法王はヴァチカン内の改革を断行しようといろいろ提案したが、なかなか前に進んでいかない。例えば、一昨年９月法王は、中近東、アフリカからの難民を、各教区教会、修道院は一人以上を受け入れようと提案したが、実施されていないのが現状だ。そのために、昨夏シリアを訪問した法王は何人かの難民を、同じ飛行機に乗せてローマに連れて来た。その難民たちの世話を委託されたのが、在家集団の聖エジディオ共同体である。

法王はキリスト教者の使命を次のように語っている。「社会におけるキリスト教者の使命は、信仰をもって生命を清めることであり、我々に与えられたキリストの愛を与えることであり、同時に、エゴイスム、嫉妬、誹謗中傷などのウジ虫を排除することである」。法王の話はキリストの「山上の説教」を窺わせる。「人よ“光”であれ、地の“塩”であれ」という。そして生命に関して「避妊」や「安楽死」を語り、「生命は聖なるものだ」と強調する。これらに関しては、ヴァチカン内では異存はないようだが、法王の提唱する教会は貧しくあるべきであり、離婚者や再婚者を聖餐式に参加させようとの提案はかなり抵抗があるようだ。これは改革派と守旧派との対立と言うことができよう。対立の根底には、マルタ騎士団の団長の解任問題も絡んでいるようだ。

マルタ騎士団

マルタ騎士団について少し説明をしよう。マルタ騎士団は元々聖ヨハネ騎士団と呼ばれていた。これは信者集団であり、聖地巡礼者の生命と安全を守るために、さらにはその人たちの中で、負傷したり亡くなったキリスト教徒たちを援助したり、治療したり、手厚く葬っていた。創設は1048年で、拠点はエルサレムだった。1096年には十字軍の活動が始まり、騎士団はキリスト教軍の負傷者や死者を手がけることが多くなった。そのうち、アラビア人との戦い、さらにトルコ人との戦いにおいて不利になり、ロードス島に移った。そこでの活動も難しくなって、マルタ島に撤退した。そこから、マルタ騎士団と呼ばれるようになったのだ。

マルタ騎士団は一つの国でもある。国連にも認められ、現在100カ国以上と外交関係を持っている。現在13,500人の騎士と女史が世界に散らばっていて、外交団も常駐している。一つの国として、国旗を有し、切手やコインも発行し、病院や養老院等も経営している。政治的にはどこにも属さないが、国と国との揉めごとがあるとその仲介役を務めている。

マルタ騎士団に領土はない。団長は国家元首でもある。そのためにイタリア・ローマに居を定めた。彼らの法権が及ぶのはローマのコンドッティ通りの宮殿とアヴェンティーノの丘の宮殿だけである。マルタ騎士団はヴァチカンに認められ、支えられていた。それゆえに、特に時の法王に忠実でなければならない。最後の団長、イギリス人のロバート・マットゥー・フェスティング（現在67歳）は1977年にマルタ騎士団に入会し、2008年に79代目の団長に選ばれている。しかし。最近では彼の専横振りが目立って来た。そのため法王は、昨年12月より団長の辞任を勧告していた。しかし、「自分は国連にも認められた一国の団長であるから法王の忠告は聞かない」と突っぱねていた。それがやっと１月28日、団長自ら辞任を発表して、この問題に幕を下ろした。

メデュゴリエ（MEDJUGORJE）は聖地になるか

メデュゴリエは旧ユーゴスラビア、現在のボスニア・ヘルツェゴビナ国のヘルツェゴビナ・ナレンダ州にある小さな町である。それが聖母マリアが顕現した1981年６月24日以降、カソリックの巡礼地の一つとなった。

1981年はまだ旧ユーゴスラビア社会主義共和国時代で、警察は聖母マリアが現れるという所を閉鎖してしまった。それでも聖母マリアは現れ、それが35年も続いている。ヴァチカンは1991年ザーラで会議を開き、聖母マリアは現れることはないとした。さらに2007年、時の国務長官ベルトーニを中心にして、1991年の声明を支持した。しかし、その後も聖母マリアは現れているという。ヴァチカンは2010年３月17日ルイーニ枢機卿を団長として調査団を派遣した。2014年１月17日調査委員会は調査を終え、各資料はヴァチカンの教義聖省に送られた。そして今年法王によって特別調査団がメデュゴリエに送られることが決まった。今日、聖母マリアが現れ、聖地として認められているところは、フランスのルルドとポルトガルのファティマしかない。この２カ所は一時期マリアが何回か現れたということである。しかし、メデュゴリエは35年も続いてマリアが現れているのだ。しかも、ルルドやファティマと異なり、最初に聖母マリアが顕現した姿を見たという人が６人もいるのだ。メデュゴリエはいずれ聖地として認められることになるかもしれない。